

法、周囲の教師陣との意見の食い違い。その中でも、トリイ・ヘイデンという女性にとって大きなダメージを与えたのは、最愛の人、ジョクとの別れだと思う。不満を感じながらも、心の拠としていた。その彼と別れる原因となったのは、彼女が愛してやまない子どもたちだったのだから。しかし、トリイは彼と別れた後も、子どもたちを決して見放さなかった。不思議な力を持つ子どもたちを守り続けた。「人間もヒヤシンスの球根と同じようなものなの。」トリイがロリに言った言葉だ。人間もヒヤシンスと同じで、時期が来れば必ず花開く時がある。今は、まだ眠っているだけなのだ。トリイの言葉の一つ一つが、子どもたちを少しずつ成長させていったのだと思う。だから、子どもたちは、いつの日か花開く時のために、ゆっくりとヒヤシンスの根を伸ばすことができたのだと思う。

に言うことしかできなかった。ブーの感情を表す唯一のもの。それは、奇声だった。話の中段に差し掛かると、ブーは単語を話せるようになっていた。ワンワン、ベンジー、ニャンニャンの三つだ。ロリの用意したカードの中にある動物をととても嬉しそうに眺め、ロリやトマソに教えられながら話すブー。ブーが話したことにもそうなのだが、あれほど荒れていたトマソがクラスに馴染み、ブーが話すきっかけを作った。このクラスにとって、とても大きく、とても良い出来事だったのだと思う。子どもたちの変化していく様子、一つ一つの言葉に感動した。私は、読みながら特別に気に入ったページに付せんを貼り付けていた。何度読み返しても、涙が出てくるページもある。

「わたしたちみんな、ここではどうせよその子じゃない。なんでそんなに気に掛けるの？」

そんなこと無いよ、クロードイア。あなたたちは、トリイにとってかけがえのない大切な存在だったんだと思うよ。絶対に、よその子なんかじゃなかったんだ。私はクロードイアにそう言いたい。

